

# 「古文書」との出会いの旅

泉 雅博

少し時間に余裕ができる旅に出たくなる。ただ、それは観光としての旅ではなく、「古文書」との出会いを求めての旅である。

古文書とは、文字通り古い時代に書かれた文書で、日本の歴史・社会・文化を正確に理解するための基礎的な史料である。和紙に書かれ今日に伝来する古文書では八世紀初頭のもの最古であるが、以後、時代が下るにつれてその数は増している。文字の読み書きが庶民層にまで普及する江戸時代以降の古文書ともなると、伝来量は膨大と形容するほかない。天皇家や旧将軍家・旧大名家・大社寺などとはもとよりであるが、かつて村の名主を務めていた家や造り酒屋・質屋、あるいは織元・網元等であった旧百姓家などにも文書を伝える家が多く、その量が一万点を超える家も稀ではない。しかしその結果、江戸時代にさかのぼる古文書については、一方でかなりのものが未発見・未調査のま

ま旧家の蔵の中などに埋もれているという現実も存在する。私の旅とは、これら埋もれたままになっている古文書との出会いを求めてのものである。

思い起こせば、初めて古文書に触れたのは、神奈川県大学在学中の二十歳のときだった。恩師の故長倉保先生に同行し、栃木県下の古文書調査に出掛けたときにさかのぼる。長倉先生は「地方文書」の精密な実証分析を信条とされており、調査先の大半は村の旧家であった。江戸時代に村の名主などであった家に伝来する文書を地方文書と呼んでいるが、現状でもこれらの大半は未調査であるように、三十年前にあつては調査そのものが所蔵家からは珍しがられた。しかし、事情を話し蔵の中に一歩足を踏み入れると、おそらくそこに仕舞われてから誰も手をつけたことがなかったと思われる文書が、筆筒の抽斗や長持などから続々とあらわれる体験を何度もすることとなった。これらの文書

を虫干しを兼ね縁側に広げながら、所蔵家の老夫妻などと先生との話しを聞くのめたいへん勉強になった。

古文書調査の旅は、日本常民文化研究所とかかわるようになってから、日本の各地へと広がった。洪沢栄一の孫の洪沢敏三によって大正年間に創設された日本常民文化研究所は、戦後の早くに水産庁が進めた漁業制度改革の一環として、全国各地の漁村に伝来する古文書調査の事業に着手した。この事業は、全国に及ぶ漁村文書の蒐集・整理・刊行の仕事を推進することによって、本格的な水産資料館を設立し、それを永続的なものにしようとするところに目標があったという。しかし、事業は中途で挫折し、借用した文書のかなりのものが長期間返却されないまま研究所に保管されるという事態が発生した。これらの未返却文書は、日本中世史・日本海民史の研究で知られる網野善彦先生の四十年余にわたる努力によって、現在その大半は返却などの手続きが終えられているが、私が日本常民文化研究所に出入りする機会を得たのは、この返却の仕事にかかわらせていただいたことによる。毎週金曜日、日本常民文化研究所の一室で古文書の目録取りの作業を行い、そのあと網野先生を囲んで小さな研究会を持った。そして、さらに研究会後の居酒屋での一献と議論も楽しみの一つであった。このような日々は約十年間続いたが、おそらく今後、もう二度とあのようによく充実し楽しかった時期は訪れることはない

だろうとさえ思っている。現在、私は能登・佐渡・伊豆などの海村の古文書調査を行っているが、それらはすべて日本常民文化研究所とかかわりによる。そしてまた、これらの土地でも、今もって栃木県で初めて体験したのと同様の体験をしている。日本全国どこへ行っても、埋もれたままになっている古文書が存在するのである。それは、京・奈良でも、沖縄・北海道でも同じである。

古文書は日本を理解するための基礎的な文献史料である。その古文書の江戸時代にさかのぼる相当量が、現在でも蔵の中でホコリをかぶったままであったり、ネズミの巣になっていたりしていることは、日本文化が朽ち果てるままに放置されていることに等しいだろう。もちろん、こうした現状を憂い、各地の歴史関係機関を中心に古文書の調査・整理・補修、そして保存活動も活発化してきつつある。しかし、予算規模・調査人員と未整理文書の量が匹敵しない悩みをどこでも抱えている。それは日本常民文化研究所でも同じであった。

四年前から私は、本学の学生たちとも古文書調査を始めた。古文書に関心を持つ数名の学生と、夏休みを利用して登半島へ出掛け、埋もれたままになっている文書の発掘作業を行っている。現在取り組んでいる文書は、輪島市鳳至町の商家久保家の所蔵する文書で、あと一、二回調査をすればその全貌が明らかになるところまでできた。おそらく三

千点にはなるであろうこの未整理文書を、一点一点文書整理封筒に詰め、目録を取り、そしてマイクロ化する作業を根気よく続けてくれている学生たちは、全員ボランティアでの参加である。対価の得られない作業に協力してもらっているが、きつと無形の何かを得てくれているものと信じている。もちろん、毛筆で書かれた文字は簡単には読めないで、調査中は悪戦苦闘の毎日である。しかし、専門的技術は後からついてくるものである。私自身がそうであったように、初めにほんの少しの興味の欠片があれば、古文书への扉は開かれる。

月日の過ぎ去るのは早いもので、古文书との付き合いも、はや三十年余に及んでしまった。時に研究の進展の見られない自分と対面し慄然とすることもあるが、その三十年余を振り返ってみると、この間いつも自分は同じ場所から問いを発し続けてきたのではないだろうかという思いに至る。その場所とは、唐突に思われるかも知れないが、今は失われてしまった幼少年期の古里の暮らしと風景である。いつもかたわらに幼少年期の古里をおきながら、各地の古文书をひもといてきたように思う。

現在、日本社会が未曾有の大変動のただ中にあることは、だれの目にも明らかだろう。そのなかで、これほどまでに画一的で無機質な文化的状況が列島全域を覆いつくそうとしている時代は、今までに経験したことがないように

思われる。かつて列島の東西・南北には独自の地域性を帯びた文化が展開し、変化に富んだ自然と向きあった人々の暮らしは、平地ばかりでなく海にも川にも山にも野にも営まれていた。そして、それは私にとって、幼少年期の古里の風景そのものなのである。しかし、今や地域は行政区分上の名称としてのみ存在するかのようであり、人々の暮らしは自然に背を向けたところにしか豊かさを求められなくなっているのではないだろうか。

古文书調査に出掛けた土地で、その土地の空気や風や光に身をゆだねながら文書一枚一枚をめぐっていると、ふと私たちの先祖はこの国の行く末をどのような眼差しで見つめているのだろうかと思うときがある。その眼差しには、憂いがたたえられていないだろうか。

かつて、この列島上に生きた名もなき人々の手跡にも、現代を撃つ力があると信じている。打ち捨てられていた文書にも、新しい列島の文化的景観を開く力があると信じて、これからも私は多くの人々との出会いもかさねながら、古文书との出会いの旅を続けていきたいと思っている。

(いずみ まさひろ・日本文化史)